# 交差する眼差し

## ラテンアメリカの
## 多様な世界と日本

浅香幸枝 編

行路社

編者紹介

浅香 幸枝（あさか さちえ）

南山大学外国語学部准教授、同ラテンアメリカ研究センター研究員。日本移民学会会長（2018年6月～現在）。

1981年南山大学外国語学部卒業。1983年上智大学大学院外国語学研究科国際関係論専攻博士課程前期修了。国際学修士（上智大学）。2008年9月から2009年9月まで名古屋大学大学院国際開発研究科に国内留学。2009年10月から2012年3月まで同研究科非常勤講師。博士論文提出、博士（学術、名古屋大学）。

主な著作：1）『地球時代の日本の多文化共生政策――南北アメリカ日系社会との連携を目指して』（明石書店、2013年、2017年第2刷）、2）日本移民学会編『日本人と海外移住――移民の歴史・現状・展望』（共編著、明石書店、2018年）、3）『地球時代の「ソフトパワー」――内発力と平和のための智恵』（編著、行路社、2012年）。

交差する眼差し
ラテンアメリカの多様な世界と日本

2019年3月15日　初版第1刷印刷
2019年3月31日　初版第1刷発行

編　者――浅香幸枝
発行者――楠本耕之
発行所――行路社　Kohro-sha
520-0016 大津市比叡平 3-36-21
電話 077-529-0149　ファックス 077-529-2885
郵便振替　01030-1-16719
装　丁――仁井谷伴子
組　版――鼓動社
印刷・製本――モリモト印刷株式会社

Copyright©2019 by Sachie ASAKA
Printed in Japan
ISBN978-4-87534-395-0 C3036

第9章

# 現代ラテンアメリカにおける文化・文学研究の新潮流

——エンリケ・ドゥッセルの論考を中心に

長谷川ニナ

## はじめに

本章はメキシコ在住のアルゼンチン人哲学者エンリケ・ドゥッセル（Enrique Dussel）が提唱し、いまラテンアメリカで広く論じられている「トランスモダン論」とこれまでのポストモダン論との相違に触れつつ、このトランスモダン論が、現在のラテンアメリカ文化研究に多大な影響をもたらしていることを示す。そしてドゥッセルの属する「近代性／植民地性を考えるネットワーク（Grupo Modernidad/Colonialidad—以下、Grupo M/C と略す）」と呼ばれる新しい思想傾向を持つ研究者グループについて、これがどのような人々によっていかにして形成されたものであるかを簡単に解説する。

また、この Grupo M/C の研究者たちがひんぱんに用いる「権力が内包する植民地性からの覚醒（desprenderse de la matriz colonial del poder）」および「脱植民地化への転回（Giro Descolonizador）」といった概念を紹介するとともに、これらの概念が従来のポストモダン論といかなる点で異なり、かつこれまでの「解放の神学・解放の社会学・解放の哲学（la Teología de la Liberación/Sociología de la Liberación/Filosofía de la Liberación）」と、どのような点で共通点を見いだせるかを検証する。さらにこれまで「西欧

の優越性」とされてきたものが、非西欧世界においていかなる形で表現されてきたかの例を挙げつつ、ラテンアメリカ文化研究における「脱植民地化への転回」概念の具体例を示す。

## 1　トランスモダン対ポストモダン

今日、ラテンアメリカの文化・文学研究について論じる際に無視できない言葉として「トランスモダン」という概念がある。この概念はドゥッセルが亡命先のメキシコにおいて初めて提唱し、学術分野では十年ほど前から定着したもので、研究分野のみならず日常生活においてもラテンアメリカ世界に（全世界的にも）まつわりついてきた、西欧的「近代性」を乗り越えようとすることを指し示す概念である。

ここで言う「近代性」とは、ドゥッセルや彼と同じ傾向を持つ Grupo M/C の研究者たちにとっては「植民地性」を構成する要素として否定的に捉えられているものである。狭義の「植民地」と「植民地性」とのあいだには明確な差異が存在する。すなわちここで言う「植民地性」とは、ラテンアメリカの旧植民地においては政治的な独立を達成した後も、依然として西欧文化モデルが普遍的、優越的なものとして地域本来の文化を圧迫しつづけるため、人々は自国固有の文化を劣ったものとみなし、植民地的価値観のもとで生き続けることを意味する。

19 世紀・20 世紀におけるラテンアメリカ各国の支配層は、宗主国からの独立後も、自国の文化的伝統を卑下し、国民の「西欧化」を渇望、欧米モデルを適用しようとしてきた。20 世紀の 60 年代・70 年代に、「解放の神学・解放の社会学・解放の哲学」や「従属理論（La Teoría de la Dependencia）」が登場してきたこと自体、この時期になっても真の意味での独立、植民地性からの脱却が達成されていなかったことを意味しよう。

しかしながら、現在では旧植民地の多くの人々は、もはや欧米の生活様式をかつてのようにアプリオリに理想的なものとは見なさなくなりつつある。それどころか例えばポルトガルのボアベンチュラ・ジ・ソウザ＝サントス（Boaventura de Sousa Santos）らが提唱するような新思想の潮流が生まれ、旧植民地の人々が地域本来の文化を取り戻し、「正しい道を進む」べく、

その文化的伝統を再生、強化しようとする試みが生まれてきている。言うまでもなく「正しい道を進む」とは、無条件の「欧米化」ではないということである。

この自己解放プロセスを、ラテンアメリカでは「脱植民地化への転回」と呼ぶ。この概念は1998年、ラテンアメリカの一群の研究者たち、エンリケ・ドゥッセル、ウォルター・ミニョロ（Walter Mignolo）、アニバル・キハーノ（Anibal Quijano）、アルトゥーロ・エスコバル（Arturo Escobar）、サンティアゴ・カストロ＝ゴメス（Santiago Castro-Gomez）、ラモン・グロスフォーゲル（Ramón Grosfoguel）などが、アメリカ合衆国においてラテンアメリカ・サバルタン（従属的諸階級民衆）研究グループ（Latin American Subaltern Studies Group）や南アジア・サバルタン学派（South Asia Subaltern Studies Group）の研究者たちとポストモダンについての論争をかわしたときに、ポストモダン派の視点に少なからぬ違和感を覚え、これと袂を分かったことを発端として新潮流を形成したことから誕生した（Grosfoguel, 2013: 65-66）。

Grupo M/Cの研究者たちにとって、「トランスモダン」という概念は「ポストモダン」という概念よりはるかに重要なものとなっている。ここで「脱植民地化への転回」を支持する研究者たちを「トランスモダン派」と呼ぶとするなら、このトランスモダン派は、これまでポストモダン派の研究者たちがいわゆる「近代」の起点を18世紀としてきたのにたいして、それを15世紀末に新大陸で始まったイベリア的植民地の展開からと見做す。トランスモダン派は、近代の起点を15世紀末に置かないかぎり、近代の理解は不可能との確信を強めており、18世紀以後の研究に専念するポストモダン派は的を外していると考える。

トランスモダン派は、非西欧世界に属する人々は近代主義と植民地主義の因果関係のロジックに気づくべきであると主張する。なぜなら彼らトランスモダン派はその一連の研究によって、欧米の経済的・政治的・文化的モデルはラテンアメリカに真の繁栄を生み出すどころか貧困を生み、自由を生み出す代わりに隷属を生み出していると認識するからである。そしてこの西欧モデルのネガティブな影響を中和する唯一の方法は「権力が内包する植民地性からの覚醒」であると考える。

トランスモダン派は、こうした脱植民地思想は20世紀末に彼らがはじめて始めたわけではなく、すでに15世紀末に西欧が世界の分割を始めた時点で、その萌芽が誕生していたものと考える。それ故に彼らはラテンアメリカの過去に遡って、そのような思想に関する調査・研究をおこなう。たとえばドゥッセルは彼の論文「反デカルト的省察――近代性の哲学的論争の起源(Meditaciones anti-cartesianas: sobre el origen del anti-discurso filosófico de la Modernidad)」において、バルトロメ・デ・ラス・カサス(Bartolomé de las Casas, 1474/1484?-1566)やグアマン・ポマ・デ・アヤラ(Guamán Poma de Ayala, 1534-1615)などを、植民地時代初期のトランスモダン思想家であったと述べている(Dussel, 2014: 25)。

ドゥッセルやGrupo M/Cのメンバーたちトランスモダン派にとって重要なのは、脱植民地的志向の歴史を明らかにするだけではなく、ラテンアメリカ文化史において固定化している既存の概念を徹底的に見直すことであり、西欧の「人種的優越性」という根拠のない自我肥大が、新大陸を征服する過程においてどのように拡大されたかを研究することである。

ドゥッセルは、西欧至上主義は新大陸の発見とその富の収奪なくして起こりえなかったと考える(Dussel, 2014: 2)。イベロアメリカ地域研究者にとって、このドゥッセルの指摘は重要である。なぜなら彼の指摘に従えば、近代史の起点は1492年まで遡ることになり、それまで辺境的なものと捉えられていたイベリア半島史および新大陸史が近代初期の中心的な位置を占めることになるからである。

## 2　解放の哲学からトランスモダン思想もしくは脱植民地思想へ

ドゥッセルは現代ラテンアメリカにおいてもっとも重要な思想家の一人である。この60年間、碩学の彼は多大なエネルギーを投じて、ラテンアメリカ人のアイデンティティやその定義を追求してきた。世界史の中でラテンアメリカ史をどこに位置づけ、ラテンアメリカの文化的なアイデンティティをどう定義し、なぜそれまでラテンアメリカ史が世界史の枠外にあるとされてきたのかを解明することに強いこだわりを持ってきた。

同様に、なぜラテンアメリカにおける大きな悲劇が世界的にはさほど反響を

呼ばないのか、ラテンアメリカの民衆はなぜ貧困の中で生きる運命にあるのかを理解することが彼の目標であったが、これについては後述する。

この命題に取り組むため、若きドゥッセルは西欧的教養から見て必要不可欠と思われる多くの古典および近代の書籍を読破した（彼が教育を受けた時代のアルゼンチンの教育は西欧至上主義でもあった）。彼はアルゼンチンの国立コルドバ大学で哲学、パリのカトリック大学で神学の二つの学位を得、さらにマドリッドのコンプルテンセ大学で哲学、ソルボンヌ大学で歴史学の二つの博士号を得ている。

30歳で他のアルゼンチン哲学者たちと「解放の哲学」の運動を始め、50代初めから8年にわたってカール・マルクス研究に没頭した。それは彼自身なかば自慢まじりに、自分はベルリンで仕事をしているマルクス手稿の編集者以上にマルクスを熟知しているかもしれないと、語りうるほどのものであった（https://youtu.be/aqSHYoMwsrw, 1:15:00）。

1979年、ジャン・フランソワ・リオタール（Jean-François Lyotard）が『ポストモダンの条件（*La Condition postmoderne*）』を著し、80年代はポストモダン論が一躍注目を浴びるようになるが、この時期のドゥッセルはマルクス研究に没頭しており、さらに1989年から2002年にかけて、ドイツの哲学者カール・オットー・アーペル（Karl Otto Apel）との濃密な論争に身を投じていた。ドゥッセルはこの時期のアーペルとの論争はきわめて有益で、1492年に始まる近代以後、辺境の地の哲学者と宗主国の哲学者がはじめて対等な立場で論を交わしたという点で重要であったと語っている（https://youtu.be/7JC5K6lckxl, 00:41:15）。

このような状況の下、ドゥッセルは1998年にGrupo M/Cの研究者たちとの本格的な議論に初めて加わったのだが、「脱植民地化」の概念を推し進めることは、彼にとっては比較的平易な問題であった。アーペルとの議論と並行して、彼は世界各地の歴史学、政治学、哲学各分野の専門家との対話を継続していたからである。例を挙げると1993年にイタリアのジャンニ・ヴァッティモ（Gianni Vattimo）と「ポストモダンおよびトランスモダン論」について、1999年にスペインのアデラ・コルティナ（Adela Cortina）と「内面性と人類の未来の危機」について、2004年にアイルランドのジョン・ホロウェイ（John Holloway）と「政治的合理主義の危機」について、2009年に米国のイマニ

ュエル・ウォーラーステイン（Immanuel Wallerstein）と「世界システム論と21世紀の挑戦」について、2013年にはソウザ＝サントスと「「南」の認識論的脱植民地化」について論じている。ドゥッセルは今日、現代の西欧知識人と対等の立場で近代性及びポストモダンを論じうる、卓越した地位を確立している。

2015年に80歳を迎えてもドゥッセルは衰えを見せることなく、精力的に講演等をこなしている。彼の近代とトランスモダンに関するダイナミックな研究を契機として、60～70年代に活発におこなわれた「解放」をモチーフにした社会学的・神学的・哲学的論争はふたたび活性化された。膨大な読書量と執筆量にもかかわらず、ドゥッセルは書斎に籠もるだけの研究者ではなく、たゆみない旅人であり、中南米やヨーロッパだけではなくアジアやアフリカにも足を伸ばし、彼のような立ち位置の「南」の哲学者とも意見を交換し、世界認識を深めている。

ドゥッセルの提唱した「脱植民地化」論は、その支持者のみならず反対派をも巻き込み、ポストモダン論・トランスモダン論もしくは同概念の周囲で様々な反響を呼び、ラテンアメリカのアイデンティティ分析のメソッドを豊かにし、「南」から見た新しい世界史を構築するための新たな独自の道を拓くことに貢献してきた。以下にこの「脱植民地化」概念が、ラテンアメリカ文化研究にどのような影響を及ぼしているか具体例を述べることにする。

文学分野においてはラテンアメリカの現実からラテンアメリカのアイデンティティを考察するという点で、ドゥッセルに匹敵する人物としてペルーのアントニオ・コルネホ＝ポラール（Antonio Cornejo Polar）の名を忘れてはならないが、彼については後で取り上げるとして、ここではとりあえずドゥッセルとGrupo M/Cの思想について短くまとめる。

## 3　脱植民地化と多元的世界観（mundo pluri-versal）

1980年代および90年代のポストモダン論争を発端として、1998年からドゥッセルは前述のミニョロ、キハーノ、グロスフォーゲル他のGrupo M/Cのメンバーらと共に新たな世界史像の構築を促した。文化研究の舞台におけるGrupo M/Cの登場は必然的にラテンアメリカ研究に新たな光を当て、同時に

そのことが多元的世界観への扉を開くことになったのである。

先に述べたようにドゥッセルは、1492年のコロンブスの「新大陸発見」こそ、現代の「植民地主義」「西欧中心主義」「資本主義」および「近代」の起源であったと喝破し、「近代」の起源をルネッサンスやグーテンベルグによる印刷機の発明などのイノベーションに置く見解を根拠薄弱と見なす（Dussel, https://youtu.be/ml9F73wlMQE, 09:25-10:10）。

ドゥッセルは1492年まで、この世界には西欧中心主義は存在せず、従って世界を単独支配するものはなかったとする。コロンブスがアメリカ大陸に到着した段階でも、まだ「一元的・普遍的なもの」は存在しなかった。であるからこそ、彼にとって「脱植民地化」とは多様性が奪われる以前の世界に戻るということなのである。ドゥッセルの研究は単にポストモダン論に対する反論というだけでなく、我々が生きる世界をよりよく認識させる概念を構築する上で重要である。

ドゥッセルによれば、こうした「脱植民地化への転回」は1960～70年代以後、ラテンアメリカのアイデンティティをめぐって展開したラテンアメリカ文学の「ブーム」、「解放の神学」、「解放の社会学」、「解放の哲学」、経済における「従属理論」さらには「被抑圧者の教育学（Pedagogía del Oprimido）」などをめぐる論議の結果としての認識論であるとする（Dussel, https://youtu.be/ml9F73wlMQE, 01:30-02:35）。

エドワード・サイード（Edward Said）の『オリエンタリズム（*Orientalism*）』（1978）、ラナジット・グハ（Ranajit Guha）とガヤトリ・チャクラヴォーティ・スピヴァック（Gayatri Chakravorty Spivak）らによる一連のサバルタン研究、リオタールによる『ポストモダンの条件』などが出現する以前の1969年から1970年の時点で、すでにラテンアメリカ人がグローバリゼーションの地平について様々な考察をおこなっていたことはドゥッセルにとってきわめて興味深いことであった（Dussel, https://youtu.be/ml9F73wlMQE, 05:24-05:48）。

ドゥッセルは1976年の著作『解放の哲学（*Filosofía de la Liberación*）』のなかで、彼はいわゆるポストモダン論議が盛んになる以前から、独自に「ポストモダン」という用語を使っていたのだが、後にリオタールの用法と区別するために「トランスモダン」という用語に切り替えたと述べている（Dussel,

https://youtu.be/ml9F73wlMQE, 03:50-04-18)。

彼の「解放の哲学」はフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Lévinas）の論じた「他者」の概念を元に、ラテンアメリカ人自らが自分たちはヨーロッパ人にとっての「野蛮な他者」と見なされてきた存在であると認識することから誕生したとドゥッセルは語る。すなわちラテンアメリカ人とは歴史から疎外、黙殺されてきた「他者」であったということである（Dussel, https://youtu.be/ml9F73wlMQE, 06:00-07:24)。

ドゥッセルおよび Grupo M/C の主要メンバーにとって明らかなのは、

1. 西欧文化の優越性は現実的とは言えない。なぜなら 1492 年までは他のいかなる文化と比較しても優越的ではなかったからである。
2. 「近代（modernidad)」はコロンブスのアメリカ大陸到達によって始まった。なぜなら西欧は新大陸の富なくして航海術のさらなる発展もなく、アラブ世界に取って代わることはできなかったからである。
3. デカルトの「我思う、ゆえに我あり」という命題が「近代」哲学の始まりとはいえない。なぜなら「近代」は、すでにその約 150 年前のエルナン・コルテスの「我、征服す（ego conquiro)」より始まっているからである（Dussel, 2014: 15, 51-52)。
4. ヘーゲルがその著作『歴史哲学講義』において南欧を除外した際に、ラテンアメリカの存在もまた「歴史の外」に置かれてしまった。
5. 西欧個人主義は不自然なものである。なぜなら人間の共同体的側面を軽視しているからだ。
6. ラテンアメリカ社会においては一見、現在でも封建主義的要素が残っているように見なされることがあるが、実際のところそれは本来の封建制の残滓ではない。なぜなら資本主義は 1492 年の「発見」とともに誕生したからである。
7. 近代西欧文明の本質は人権を語りつつ奴隷制度を維持するなどのダブルスタンダードの容認である。
8. 近代哲学最初とされるデカルトの「我思う、ゆえに我あり」の命題は微妙な問題を孕んでいる。なぜなら当時劣等と見なされていた女性や

有色人種は、西欧人男性から「同等の人間」とは見なされておらず、「我」から除外されていたからである。

9. 「野蛮人」「未開人」の概念は突き詰めて研究しなければならない。なぜならこの二つの概念は、非西欧世界の「他者」を対等に見ていないからである。

20世紀の60年代から90年代は、ラテンアメリカ地域においてきわめて濃密な研究がなされた時期であった。60年代の終わりには「ラテンアメリカにおける思想の独自性の欠如」に関しての論争が起こった。その始まりはメキシコ大学院大学で、スペインの哲学者ホセ・ガオス（José Gaos）に学び、さらにメキシコ国立自治大学でレオポルド・セア（Leopoldo Zea）、ソルボンヌ大学でガストン・バシュラールに教えを受けたペルー人哲学者アウグスト・サラサール＝ボンディ（Augusto Salazar Bondy）によるものであったが、この論争が1968年から69年に「解放の哲学」へと結実していく（Dussel, https://youtu.be/aqSHYoMwsrw, 56:00-58:11）。それは後にポストコロニアル理論の先駆と呼ばれ、論争を呼ぶことになったサイードの『オリエンタリズム』の出版の10年も前のことであった。

60年代から80年代におけるラテンアメリカの軍事政権の時代、ラテンアメリカでは夥しい数の知識人が政治亡命者として国外に逃れたが、その亡命の間も研究が停滞することはなく、むしろ亡命によって地理的境界を超えたことが相互に影響を与え合う結果をもたらした。ドゥッセル自身も1976年、アルゼンチン軍事政権を逃れてメキシコに亡命しており、メキシコ国籍を取得し、メキシコの大学で教鞭を執っている。

1980年から1990年にかけて、彼はメキシコ国立自治大学の学生たちと共にレヴィナスの概念に照らしてマルクス理論の再解釈に挑み、その成果として現代のマルクス主義思想に新しい解釈をもたらしている（Dussel, 2003: 9）。一例を挙げると、従来の教条的マルクス主義解釈においては、アメリカ大陸における植民地経済システムは封建主義であり、商業資本主義ではないと見なされていたが、ドゥッセルはアルゼンチンのマルクス主義者セルヒオ・バグ（Sergio Bagú）が、すでに1949年の段階でこの解釈に疑問を投げかけていたことに着目し、ラテンアメリカ世界でのマルクス思想の教条的適用を批判し

ている（Dussel, https://youtu.be/ml9F73wlMQE, 12:00-13:15）。

こうしたマルクス思想の再検討もふくめ、「トランスモダン」論はこの30年間にラテンアメリカにおいて経済・哲学・文学・文化に関する論議が活発におこなわれた成果として誕生した。その結果、多くのラテンアメリカ研究者の関心は、西欧世界にのみ眼差しを向けている感のあるポストモダン論よりも、植民地主義と近代主義との関連性をより明確にする方向に向けられている。

今日、トランスモダン派の間では「西欧の優越性」からの脱却のみならず、「西洋の優越性」そのものに対する根本的な見直しが論議されるまでに至っている。西欧思想のダブルスタンダード性（ソウザ＝サントスの言ういわゆる「底知れない欺瞞（pensamiento abismal）」）およびあらゆる文化に西欧的価値が普遍的に適用できるとする傲慢さ、デカルトの「我思う、ゆえに我あり」のような過剰な個人主義、あるいはニュートンの提唱した「直線的な時間」や「進歩」という概念なども分析の対象となりはじめている（Sousa Santos, 2010: 70）。

ここでは紙数の関係上「知の脱植民地の再構築」を提唱するソウザ＝サントスの著作『「南」の認識論（*Epistemologías del Sur*）』を論じることまではおこなわないが、同書においてソウザ＝サントスは西欧のダブルスタンダード性にたいする徹底的な再検討と、西欧の唱える「普遍性」幻想の解体を進めることと並行して、非西欧的な価値観の再評価を提唱していることを明記しておく。

## 4　19世紀メキシコ人作家クエジャールの中の「不存在の社会学」

トランスモダン派と近い関係にあるソウザ＝サントスにとっては、非西欧圏における搾取を正当化する「底知れない欺瞞」の構造を暴くことこそ重要な課題である。彼は今日「第三世界」と呼ばれる地域からの富の収奪のために生まれた「略奪と暴力」が、いまや「先進国」の領域に逆流し、その結果、西欧の強欲に端を発した負の遺産の広がりを堰き止めうるはずの「人権」にも限界がきていることを示唆している。

ソウザ＝サントスが提唱した言葉に「不存在の社会学（sociología de las ausencias）」がある。「存在しないものは意図的に「存在しないもの」として

つくり上げられる」とする概念である。ソウザ＝サントスは「資本主義は極めて巧妙に非ヨーロッパ人種や女性を劣等なものとして扱うことで利用してきた。とりわけ人種差別はより根深くつくり上げられた」とし、「この（人種差別的、性差別的）論理によれば、決定的に劣っているものは存在していないに等しい。であるからそういった劣った存在は劣っているがゆえに、優越している側にとっては選択肢にはなりえない」（Sousa Santos, 2010: 23）と述べる。

トランスモダン派によれば、スペインとポルトガルは1837年に出版されたヘーゲルの『歴史哲学講義』以来、ヨーロッパ史の中心から「姿を消した」とされる。優越する西欧にとってスペイン、ポルトガルは存在しないに等しいものとする、この人為的「不在」の論理的帰結により、これらの「消された」地域の文化的特徴を分かちあうスペインとポルトガルの旧植民地の人々は、西欧「近代」からの疎外感を覚えることとなった。それは彼らの抱く先住民に対する優越感とあいまって、彼らの内部に複雑な感情を形成する。

ラテンアメリカで生まれ育った者にとって、目の前にいる他者の存在をあからさまに否定するこの種の手法は日常茶飯事であった。19世紀のメキシコ人作家ホセ・トマス・デ・クエジャール（José Tomás de Cuellar）にその例を見てみよう。

クエジャールはそのエッセイ「Después de Muertos（死者の日が明けて）」（クエジャール全集第IX巻：1890）の中で、メキシコ人が「死者の日」の行事に熱狂することを嘆いている。彼は「無教養なインディオやメスティーソが、死者の日に一年でもっともまずい焼き菓子やら、この世で最悪に醜く臭いマリーゴールドの花や蝋燭を供え、香を燻すことはまだ理解できる」としても「上流階級がもっとも卑しい階層の者たちと一緒になって、先祖の慰霊をこういった祭り騒ぎで祝うこと」に強い違和感を覚える（105-106）。

クエジャールがメキシコ人のアイデンティティにとって欠かせない――日本で言えばお盆に相当する――地域の文化的伝統に根ざすこの行事を侮蔑するとき、ソウザ＝サントスの「劣っているものは存在していないに等しいゆえに選択肢にはなりえない」とする定義が鮮やかに当てはまる。クエジャールの時代には彼のような開明派であってさえ、インディオやメスティーソの土着的文化は、優越している西欧的価値の前では「選択肢にはなり得ない」存在だったわけだが、さらに事態を複雑にさせているのは、クエジャールにとってヘーゲル

により西欧の中心から除外されたスペインから伝わるカトリック文化もまた拭い去りたいものであったことだ。

クエジャールは小説『ナルシストのチュチョ（*Chucho El Ninfo*）』（クエジャール全集 V-VI 巻：1890）の中で、19 世紀半ばのメキシコ市におけるメルセーの守護聖母の祭りについて、その宗教的情熱を詳細に描写しつつ、それにたいする批判を逆説的に繰り広げる。

クエジャールは「この行事は当時、祖国の他のいかなる栄光よりも民衆を熱狂させるものであった」（V 巻：23-24）と述べ、下層の人々は「宗教的な熱狂に引き摺られ」「花火を成功させるために 6 カ月分の給料を前借りし」（V 巻：23-24）、普段は怠け者の酔っ払いで貯蓄などしようとしない職人たちが昼夜を分かたず働き、「何が何でも優先的に」教会に寄進し（32）、「教会の入り口で集められる寄付は 7 倍ともなった」（38）と記す。

そしてこの祝祭に向ける教会の施策を以下のように厳しく批判する。すなわち教会の管理人は花火の費用をまかなうため「15 世帯以上の貧しい借家人を差し押さえ」、その一方「物乞いに献金箱と献金皿を持たせ、地区を回って寄付を集めさせる」などして「レフォルマ戦争の後でさえ共和国政府や税務署がなしえないほどの」金額を集めた（32-33）と指弾するのである。

クエジャールは、スペイン系植民地世界は独立の獲得や共和制改革にもかかわらず、依然として何も変わっていないと嘆く。教会は強固な権力を保ち続け、人々の生活様式も昔と変わらない。物売りや貧しい職人たちに代表される大多数の民衆は、収入と支出を理性的に管理することができず、生涯を通じて借金を繰り返し、教会あるいはその他の祭りのために自殺的な行為に及ぶと指摘する。

クエジャールはこうした大衆の分別のなさこそメキシコの後進性の理由であるとし、この後進性を解決するには、民衆の生活や思考を近代化すなわち欧米化する以外にないとするのだが、ここで注目すべきなのは当時、メキシコの代表的な知識人であった彼を支配していた、いつまでたっても「西欧近代」に追いつけないとする、未来への展望が見通せない無力感、絶望感である。生まれながらの地域文化は「劣等」ゆえに価値を見いだせず、さりとて宗主国のもたらす宗教にも否定的感情を抱く宙吊り状態。この複雑な感情はラテンアメリカの当時の知識人に広く浸透していたものであった。

## 5　アントニオ・コルネホ＝ポラールと ラテンアメリカ文化の「不均質性」

ラテンアメリカで西欧中心主義的思考の見直しが始まり、「脱植民地化への転回」が意識されるようになった大きな契機のひとつにペルーの文芸批評家コルネホ＝ポラールの仕事がある。

1994年に上梓された『空に刻まれた文学――アンデス文学における社会文化的不均質性に関する試論（*Escribir en el aire: Ensayo sobre la heterogeneidad socio-cultural en las literaturas andinas*）』（以下『空に刻まれた文学』）は従来のラテンアメリカ文学の捉え方を一新させるものであった。

コルネホ＝ポラールは『空に刻まれた文学』のなかで、広義の「ラテンアメリカ文学」とはスペイン語で記述されたものだけに限らず、先住民言語による口承も含むものであるとし、ラテンアメリカの本源的アイデンティティはそれまで思われてきたよりもはるかに複雑で、幅広く、深みのあるものであると指摘した。それはラテンアメリカ文学批評のパラダイム転換であった。

コルネホ＝ポラールの指摘はさまざまな反響を巻き起こした。スペインの研究者ホセ・カルロス・ロビーラ（José Carlos Rovira）はコルネホ＝ポラールがもたらしたこのパラダイム転換を「不均質性と葛藤の言説（Heterogeneidad y discursos conflictivos）」のなかで論じている。

ロビーラは、コルネホ＝ポラールがペルーのインディヘニズモ文学の代表的作家ホセ・マリア・アルゲダスの作品には「文化面での対立的な様々な要素をひとつに包摂しようとする語り手の姿がある」と分析したことを取り上げて、コルネホ＝ポラールは根本的な矛盾、すなわち「スペイン語による記述」と「先住民の口承」という異質な要素をはらむ、不均質なペルー文学を分析する方法を見いだしたと指摘する（Rovira, 1999: 107）。そして、それは「混血（mestizaje）や文化喪失（transculturación）」の論理に対抗する「不均質性の概念」であり、「文化の明白な多様性が奥深く豊穣であると同時に、対立的な混迷を生み出してきたような国の文学をより良く理解するための、十分に洗練された堅固な理論的・方法論的媒体」の確立であったと述べる（Rovira, 1999: 108）。

さらにロビーラは、コルネホ＝ポラールがラテンアメリカ文化の形成過程に深い懸念を抱いていることを指摘する。それは1940年にフェルナンド・オルティスによって提唱され、1982年にアンヘル・ラマによって再評価された文化受容の論理が、「文化の融合が重要な問題を取りこぼしたまま、強者の水準で構築され、被征服者側の文化が外縁に追いやられる形で収斂してしまう」ことであった（Rovira, 1999: 109）。それは、文化対立の問題はラテンアメリカにおいてすでに解決され、現在は異文化が共存し、すべてがうまく行っているという錯覚を作り上げてしまう危険性である。コルネホ＝ポラールの言葉を借りれば、「（欧米文学、大衆文学、インディヘナ文学間の）対立的な混迷を軽視しようとするあらゆる意図は理論的欺瞞の一種」（Rovira, 1999: 109）に他ならないということである。

ウルグアイの研究者マベル・モラーニャ（Mabel Moraña）は彼女の論文「空に刻まれた文学――不均質性とカルチュラル・スタディズ（*Escribir en el aire*, 'Heterogeneidad' y Estudios Culturales）」の中で、ポラールは「歴史の中で押しつけられてきた強者側のビジョンから別の解釈を見出し、調和や安定や均質性の議論を解体し、ラテンアメリカの文化対立を構成してきた緊張を把握し、19世紀末の実証主義思想が押しつけた美しき融合や網羅主義や分類を破壊し、オルタナティブな歴史性を作り上げていくことができるような歴史的、文化的、文学的に些末な物語の意味を取り戻した」と述べている（Moraña, 1995: 282）。

アメリカ大陸においては征服以後、平和であった時期はない。文化の衝突が消滅したかのように見えるときも、それは問題が解決されたのではなく隠されているのである。また一枚岩のように見える「偉大な物語」はしばしば無数の小さな真実を覆い隠してしまう。こうした「近代」主義者が目をふさいできた真実をえぐりだしたこと、それがコルネホ＝ポラールの著作の真髄であるとモラーニャは述べる。

コルネホ＝ポラールの提唱した理論はラテンアメリカの現実から生まれたラテンアメリカにとって等身大のものである。衣服に例えるならば、それまでラテンアメリカはレディメイドの貸衣装をまとっていたが、この時はじめて自分自身のために縫製された服を意識するようになったといえよう。

コルネホ＝ポラールは文学理論のみならず、教育分野でも大きな仕事を実践

してきた。コルネホ＝ポラールは1985年にペルーの国立サン・マルコス大学に学長として就任し、彼の思想に基づいたラテンアメリカの新しい高等教育の形を模索している。

ペルーの研究者ラウル・ブエノ＝チャベス（Raúl Bueno Chávez）はその論文「アントニオ・コルネホ＝ポラールとラテンアメリカ社会に開かれた大学――サン・マルコス大学学長としての経験（Antonio Cornejo Polar y la universidad popular latinoamericana, su experiencia como rector de San Marcos）」のなかで、いかにしてコルネホ＝ポラールが大学の新しいモデルを構想し、実現させたかを記している。

コルネホ＝ポラールの理念は、従来のエリート層が望む一元的な西欧的価値観のもとで「優秀」とされるような学生ではなく、人種的、階級的に多様な、すなわち不均質な学生たちを積極的に受け入れることが「彼ら自身の備えているオルタナティブな情報」によって大学をより豊かにし、真に民主的なものとするというものであった（Bueno, 1999: 41-42）。

1960年代のペルーでは、地方の下層階級の人々にも公立大学進学への門戸が開かれたが、その結果、上流階級の人々が私立大学へ逃避する現象が起こっていた。そのような状況の中でコルネホ＝ポラールは「新しい」ラテンアメリカの公立大学のあるべき姿を構想した。それは「既成の知識を型通りに流布する」（Bueno, 1999: 45）ことではなく、「教える側と教わる側の間の認識の相互作用」（Bueno, 1999: 45）の中で知識を生み出していくことである。コルネホ＝ポラールのモットーは「教えながら学び、学びながら教える」（Bueno, 1999: 45）であった。

ブエノ＝チャベスによれば、コルネホ＝ポラールの理想は学生たち自身が「オルタナティブな知識を提案し、自信をもって推し進める」（Bueno, 1999: 45）ことであり、それによって「学びや知識の未知の領域を開拓し、さらに自ら発信し、理論にまで高める革新的な方法を啓蒙する」（Bueno, 1999: 45）ことであった。端的に言えば「世界の脱植民地化のための高等教育のモデル」（Bueno, 1999: 46）を教育実践のなかで創造しようとしたのである。

しかし、このモデルは政府の協力を得られず、財政的な問題もあって実を結ぶことはなかった。コルネホ＝ポラールは学長就任からわずか1年数カ月後の1986年に、療養と研究継続のためにペルーを離れざるを得なくなる。彼は

活動を続けるために必要な支援を申し出てくれた理解者が存在する米国に向かい、ピッツバーグ大学とカリフォルニア大学バークリー校に籍を置く。彼の仕事は今日ラテンアメリカの文学・文化研究に重要な位置を占める研究誌『ラテンアメリカ文学評論（*Revista de Crítica Literaria Latinoamericana*）』のなかで継続した。彼は米国で10年を過ごし、ペルーに帰国した年の1997年に逝去した。

## 6　先スペイン期史の再構築

ここにメキシコでの脱植民地化に則ったメソアメリカ文化見直しの一例を紹介しよう。2013年にメキシコ国立自治大学から刊行された、イッツァ・エウダベ（Itza Eudave）の『愛と穢れの間のトラソテオトル――古代メキシコの言葉とシンボルの植民地化（*Tlazohteotl entre el amor y la inmundicia: la colonización de la palabra y los símbolos del México antiguo*）』もそのひとつ。著者のエウダベはメキシコ国立自治大学のメソアメリカ研究者であり、「メキシコの脱植民地化のための研究会（Seminario de estudios para la descolonización de México）」の一員である、

エウダベは同著において、16世紀のスペイン人宣教師たちがアステカ族の女神トラソテオトル（Tlazohteotl）を「医者や産婆の治療、土地を耕す農民、機織りの仕事などを司る」聖なる存在から「汚物や肉欲や恥ずべき男女関係を象徴する穢れた神」に変貌させてしまったプロセスを解き明かしている（Eudave, 2013: 61）。

スペイン人が到来するまで、古代メキシコには「原罪」という概念も言葉もなかった。キリスト教的な「肉欲の罪」や「女性は男性を堕落させる存在」であるとする女性に対する蔑視、性を否定的に捉えるような概念はなかったとエウダベは指摘する。しかし、それでは宣教師たちはキリスト教の布教ができない。そこで「原罪」の概念を広めるため、ナワートル語で「傷つける」という意味の言葉「トラトラコリ（tlahtlacolli）」を強引に「原罪」としてしまい、愛と性を司る女神であるトラソテオトルをこの「原罪」に結びつけた。

本来トラソテオトルは「肉欲の罪」などとはほど遠い存在だった。むしろ地上でもっとも聖なる神であり、月の神であり、大地の神でもある。さまざまな

名前を持っており、時には「あらゆるものの偉大な母、または祖母」たるトシ（Toci）であり、「聖なるものの神、神の中の神」テテオ・イナン（Teteo Innan）であり、「出産の神」シワコアトル（Cihuacoatl）であり、「多産と愛の神」ショチケツァル（Xochiquetzal）であり、「竈の火の守護神」チャンティコ（Chantico）であり、「若きトウモロコシ神の母である大地の女神」トラソルテオトル（Tlazolteotl）でもある。（Eudave, 2013: 50-53）。

多くの場合、先スペイン期の聖性は二重性どころか三重性、四重性を持ち、しばしば西欧人の目には矛盾して映る価値観を備えている。そこで、スペイン人たちは本来、地上でもっとも聖なる神であり、多産と愛の神であるはずの女神を、同時に排泄と汚物の神であり、恥ずべき男女関係を象徴する神としてしまうことにさしたる矛盾を覚えなかった。それはけっして、たんなる無邪気や誤解だけではなかったのだが。

エウダベはフランシスコ会宣教師のトリビオ・デ・ベナベンテ・モトリニア師（Fray Toribio de Benavente Motolinía, 1492-1569）こそが、最初にトラソテオトルにこのような誤った定義を当てはめた人物であるとする（Eudave, 2013: 41）。トラソテオトルに関しては、植民地時代の300年間を通じてこの歪曲された解釈がまかり通り、近代に至り、より適切な考古学的解釈が出てきても、なおその誤解は20世紀末まで続いていた。1989年の段階でも研究者の間でさえ、たとえばノエミ・ケサダの著作『アステカ人の恋愛観と愛の呪術（*Amor y magia amorosa entre los aztecas*）』などにそれが見られる（Eudave, 2013: 53）。

エウダベは様々な年代記作家の残した記録や古文書、考古学的な研究を再読・分析し、さらには先スペイン期から伝わる宗教儀式の歌詞を読み込み、先住民の口承を受け継いでいる人々に取材することによって、女神トラソテオトルに本来の輝きを取り戻した。すなわち女神トラソテオトルとは「穢れや肉欲とは何の関係もなく」（Eudave, 2013: 119）、それどころか「快楽の罪などを戒めることなく、愛や性を司るものであり、（中略）精神的なものも肉体的なものも含めてあらゆる形においての愛のシンボルであった」と断じたのであった。

この結論はメキシコ人にとって衝撃的なものであった。なぜならそれは現代のメキシコ社会に色濃く染みついている女性蔑視、男性優先のマチスモが先住民の時代から続いてきた呪縛ではないことを明らかにし、人々をマチスモの宿

命という強迫観念から解放する可能性を示したからだ。脱植民地化とはまさにそういうことである。自らの文化の現実のうちにそれまで気づかなかった別のものを発見することなのだ。

## おわりに

植民地主義のロジックは、西欧世界に属さないものをシステマチックに黙殺するがゆえに、ラテンアメリカで生まれた哲学が、世界の哲学界の中で亜流の扱いを受けることになったことは意外なことではない。ドゥッセルはこの植民地的現実を乗り越え、ラテンアメリカ哲学を世界の哲学の中心的課題のひとつとして位置づけることを実現するべく、より一層努力することを表明している。

なぜ、ドゥッセルはラテンアメリカ哲学が世界の哲学界の主流に入ることが不可欠であると考えるのか。

第一に「ラテンアメリカというもの」の世界史における位置づけを改めて自覚的に考えるべきだからである。

第二に自らの現実（ポシティブな面と同時に貧困に追いやられ虐げられた者としてのネガティブな面をも）を哲学的に思索するべきだからである。

第三に「世界の主流の哲学界」の議論の中に入ることによってこそ、西欧に対しての問いかけをおこなっていくことが可能であるからだ。

もはや「ラテンアメリカ思想史」というだけでは十分ではない。西欧とは別の現実として、いまだに徹底して疎外されているラテンアメリカ哲学の想いを世界にぶつけるためには、あえて西欧の土俵に入り、西欧主流の哲学界の用語や問題提起の手法や方法論を駆使することが必要なのだ。ラテンアメリカが西欧哲学に突きつけているこの命題こそは、いまだかつて「他者」の立場から、自らを考えたことのない西欧哲学の側が、新しい方法論的な視点を開拓する、革新的・普遍的な哲学的範疇を繰り返し創造していくことを余儀なくさせるのである。

このドゥッセルの挑戦と「脱植民地化への転回」による新たな世界史の解釈は、ラテンアメリカがいかに大きな変貌を遂げてきたかを示している。それはこの地域の思想家たちがいままでに成し遂げてきたことの集大成であり、後戻りすることはない。これからの世界史は、敗者の視点・歴史から疎外されてき

た人々の視点を抜きにして語られることはないであろう。

ここまで述べてきたような、ドゥッセルやGrupo M/Cの研究者たちの先駆的な活動によって、ラテンアメリカ人の自らの文化に対する姿勢は大きく変わり始めている。ごく最近まで多くの知識層を蝕んでいたペシミズム（『空に刻まれた文学』の中でコルネホ＝ポラール自身が論じたインディヘニスモ文学を参照）はしだいに影を潜め、現在、我々が目にするのは前向きかつ創造的な姿勢である。

ラテンアメリカ人にとって「後進的」と見られることはすでに悪夢ではない。すなわち「野蛮」を排除し、より「文明的」な世界に近づこうとしている人類の長い列のしんがりに自分たちがいるという積年の劣等感から脱しつつあるといえよう。

もはやラテンアメリカ人は「人類の進歩」という普遍性を装った神話には束縛されない。いま、この地域で人々が、よりよい条件のもと生存し、生活を継続できる社会を築くには、西欧というお手本を無批判的に敷衍するのではなく、西欧的価値観とのあいだに冷静な距離を置きつつ、なにはともあれ自らの現実の上に立脚すること、すなわち脱植民地化こそ有効であると理解し始めている。

世界的にあらゆる思想、価値観が変化している時代状況の中で、ラテンアメリカが育んできた思想、哲学は、いま重要な役割を果たそうとしている。これからのイベロアメリカ研究者の取り組むべき課題は多い。

**謝辞**　本稿は、河邉真次先生、真鍋周三先生、川田玲子先生、浅香幸枝先生から有益なコメントを頂き、感謝いたします。
さらに、八木啓代氏と長谷川裕氏には文章の推敲に際して大いに助けて頂きました。ここに深く感謝の気持ちを表します。

**引用・参考文献**

Bueno Chávez, Raúl, 1999, “Antonio Cornejo Polar y la universidad popular latinoamericana, su experiencia como rector de San Marcos”, *Revista de crítica literaria latinoamericana*, No.50, pp.41-49.

Cuellar, José T. de, 1890a, *La linterna Mágica: Historia de Chucho el ninfo*, Tomos V-VI, Barcelona: Tipo-Litografía de Hermenegildo Miralles.

———, 1890b,“Después de muertos” en *La linterna Mágica: Artículos ligeros sobre asuntos transcendentales*, T.IX, Santander: Imprenta y litografía de “El Atlántico”, pp.100-115.

Dussel, Enrique, 2014, "Anti-Cartesian Meditations: On the Origin of the Philosophical Anti-discourse of Modernity", *Journal for Cultural and Religious Theory*, 13.1, pp.11-53.

Eudave, Itzá, 2013, *Tlazohteotl entre el amor y la inmundicia: la colonización de la palabra y los símbolos del México antiguo*, México: Universidad Nacional Autónoma de México.

Grosfoguel, Ramón, 2013, "The Epistemic Decolonial Turn. Beyond Political-economy Paradigms" in Mignolo, Walter D. and Arturo Escobar, eds., *Globalization and the Decolonial Option*, New York: Routledge, pp.65-77.

Moraña, Mabel, 1995, "*Escribir en el aire*, 'hetereogeneidad' y estudios culturales", *Revista Iberoamericana*, LXI/170-171, pp.279-286.

Rovira, José Carlos, 1999, "Heterogeneidad y discursos conflictivos", *Revista de crítica literaria latinoamericana*, No.50, pp.107-111.

Sousa Santos, Boaventura de, 2010, *Descolonizar el saber, reinventar el poder*, Montevideo: Ediciones Trilce.

**VIDEO**

"Entrevista a Enrique Dussel. Imágenes de la Filosofía Iberoamericana" https://youtu.be/7JC5K6lckxl（最終閲覧日 2018 年 3 月 31 日）

"E. Dussel explica la teoría: El Giro Descolonizador (The Decolonaizing Turn)" https://youtu.be/ml9F73wlMQE（最終閲覧日 2018 年 3 月 31 日）

"Enrique Dussel. Biografía intelectual (documental)" https://youtu.be/aqSHYoMwsrw（最終閲覧日 2018 年 3 月 31 日）